文章理解　解答編

要旨把握

〔№　1〕　正答　3

この問題では、本文中にも、選択肢にも「花」が数多く出てきます。つまり、「花」が主題なのであって、「花」についてどう見ているのかを整理していけば要旨が見つかります。

1．「最も美しい」のが「なに気なく咲いている」とき、とは言っていないので誤り。

2．「心を美しく磨かねばならない。」というのは本文中にもなく、意図的な見解である。

4．「最高の美を発揮するのは…香りを放つ一瞬」とは本文中になく、これも意図的な見解。

5．「自然に咲くままにまかせておくべき」は強調度が高く筆者がいう花の見方とはずれがある。

〔№　2〕　正答　1

青春時代における自我覚醒の機縁について述べた文章。

2．「その後の人生が意味のあるものかどうかが決まる」とはいっていない。

3．書物についてのみ書かれたものではなく、「師匠、恋人にも勝る」とはいっていない。

4．友情について説明した文章ではない。

5．「格闘しなければならない」は強調度が高い。邂逅の意味を「魂と魂の格闘による結合」と表現しただけで、格闘をすすめているわけではない。

〔№　3〕　正答　4

自分の「孤独」に対する考え方が現在に適応していないと指摘されたことに対するとまどいを述べた文章。

1．「そうかもしれない…私は意気消沈する」と納得しており、「プロデューサーの軽薄さに腹を立てて」はいない。

2．「自分自信が…孤独に落ち込んでいる」というのは文中にみられない。

3．「視聴者に孤独感がない」とはいっていない。

5．「そうかもしれないねえ、と私は意気消沈する」とあるから、「自信がある」わけではない。

〔№　4〕　正答　5

人間にとってのユーモアの意義を考察した文章。

1．「ユーモア」についての文章であり、単に笑いついて述べた文章ではない。

2．「ジョークやウィット」で人間は心から笑えないということはいっていない。

3．緊張や誤解の発生とジョークやウィットの多用の因果関係の記述はない。

4．「ユーモアを身につける必要がある」とまではいっていない。

〔№　5〕　正答　4

日本の詩歌における植物の扱いについて述べた文章。

1．「…詩情をかきたてることもある。」を受けて展開した結論は、「そういう例はむしろきわめて稀である。」とあるから、「詩情をかきたてられた」はこの文の主旨ではない。

2．「それらの花や葉の色を専念描写しようとしていたかといえば、そういう例はむしろきわめて稀である」ことから、その作者たちの関心は、その植物の色にあったとは言い切れない。

3．「花や草や葉は、必要不可欠な道具だて」であり、これらは色をそなえての花や草や葉であるから、自然界の色が無視されているわけではない。

5．「思ひ」という無色なもの、その働きそのものを色をそなえた「花や草や葉」という道具だてで表現しているのであるから、無色で表してはいない。

〔№　6〕　正答　3

飛行機と町中の歩行との危険度を比較することについての無意味を述べた文章。

1．「安全性の論議は…無意味である」とはいっていない。

2．飛行機の旅と徒歩の旅との危険性の比較が旅の意味を変えるとはいっていない。

4．安全性の「実証」について述べた文章ではない。

5．飛行機の危険性については述べていない。

〔№　7〕　正答　1

言語表現において、率直と傲慢は裏腹であるということを述べた文章。

2．「言語表現について、率直は一般に重要な美徳と見なされてきた」のは本文の部分としては、合っている。しかし、本文では、率直をこどもの率直さを例示して「言語表現において、率直と傲慢はほとんど見分けのつかない一卵性双生児である」としているのであるから、本文の主旨としては不適切。

3．４．本文の部分としては合っているが、２と同じ意味から主旨としては不適切。

5．本文の部分としては合っているが「こどもの率直さは、じつは自己中心主義の別名である」ことから、言語表現においての率直にまで言及していないので主旨としては不十分。

〔№　8〕　正答　5

旅の自由を取り戻すためにはどうすべきかを述べた文章。

1．「自分が旅だと信じて行動するなら、人がどう思おうが、その人にとっては旅ともいえる」が「しかし、ただの土地移動なら、それは旅行であって、旅とはいえないと考えている人がかなりある」というのであるから、主旨として不適切。

2．本文は「旅のすべてを金銭で他人に委ねている」と、「ふだん以上に束縛された旅におし込められがち」になるとしているのであり、旅行にすぎないと言い切っているわけではない。

3．「旅の自由を取り戻すため」には「自分が行動する旅の計画を旅行業者の手に委ねるのではなく」といっているのであり、なるべく金銭をつかわないようにすることが必要であると

は言ってない。

4．旅の「自由を取り戻さなければならない」ことは本文の部分として合っているが、自由を取り戻すためには「自分の旅を他人に委ねないことである」ことにまで言及していないので不十分である。

〔№　9〕　正答　1

我々の持つ知識は時間的過去から得られたものであることを述べた文章。

2．歴史は、過去が現在に与える教訓という意味で学ばれたということは述べているが、歴史をどのように学ぶべきか、というようなことは述べられていない。

3．「過去の事例について相対的に豊富で詳細な知識を持つ者は、…生起する新しい現象に対して、その新奇性よりも連想された過去の類似物との共通点の方に着目しがちである」のであって、適切な判断をすることができるとまでは述べていない。

4．5．本文では「人類の発展を促すには…」などの主張は述べられてはいない。

〔№　10〕　正答　4

芸術家の仕事は常に種々の色彩、種々の陰翳を擁して豊富であることから、作品の底を流れる作家の主張が見えはじめてから批評が可能になることを述べた文章。

1．芸術家の仕事は種々の色彩、種々の陰翳を擁して豊富であることから、何を抽象しても何物かが残る。それほどに芸術家の仕事に純粋な思想はないと述べている。

2．彷徨は思想を了解しようとすることであって、批評はその思想を了解したあとで可能になると述べているのである。

3．作家の思想を新しい角度からみるとは本文に述べられていない。

5．芸術家の作品の豊富性は本質的なものであり、見かけ上の豊富性ではない。

〔№　11〕　正答　3

同じ対象を尊敬する場合、盲目の尊敬では行けないことを述べた文章。

1．本文は、道を求める人のことを述べているのではない。盲目に同じ対象を尊敬するような人のことも述べているので主旨としては不適当。

2．道を求める人だけでなく中間人物も道の存在は客観的に認めている。

4．本文は、中間人物が盲目の尊敬をすると述べているのであって、無頓着な人が盲目の尊敬をするとは述べてない。

5．道に疎遠な人だとあきらめているのは中間人物である。

〔№　12〕　正答　5

ソクラテスの祈りとして知られている「ゆたかさ」のことを述べた文章である。

1．多くの所有がすぐに「ゆたかさ」を約束するとは言えないと述べているのであって、思慮ある人のことは述べてない。

2．富の所有のために苦労し、時には不幸になることもあるとは述べているが、多くの富の所有により「ゆたかさ」が失われていくとは述べられてない。

3．ソクラテスの祈りには、内面において美しい人間であり、所有はこの内面に和合するものでありますようにとあることから、本文は富と内面の美しさが両立しないという趣旨ではない。

4．本文には、過度の所有が人を不幸にするという内容はない。「思慮の健全な者でなければ運ぶことができないほどの所有をさずけたまえ」とソクラテスは祈っているのである。

〔№　13〕　正答　4

欲望が無限であるという先入見が誤りであることを食欲を例にして説明した文章。

1．人間の欲望に限界があるのは食欲だけではない。食事に演出をするのは、食欲を増進させるためではなく、少量の食物を最大の時間をかけて消耗するためである。

2．本文だけでは、他の欲望と異なるかどうか判断できない。

3．食事のときの演劇的儀式は乏しい食物ではなく食欲そのものの乏しさを知っていることから生まれてきたものと述べている。

5．食事のときの作法や儀礼というものは、欲望は無限だという誤解から生まれたものではなく、逆に乏しい食欲という限界ある欲望をより多く楽しむためにうまれたのである。

〔№　14〕　正答　3

ことばの効用と限界を述べた文章。

1．出来合いの言葉を無反省に使う精神は、ちょうどおしゃべりの人間に概して考え深い者はいないように、と述べていることから、おしゃべりな人間が言葉の意味合いの本質を理解しているとはいえない。

2．「何ともいえぬ…」という言い方は、言葉の表現力に限界があるということを示しているのであり、表現力の不足という問題ではない。

4．機械文明の驚くべき進歩によって言葉が～物との間のつながりを切断されてしまったというのであるから、言葉による表現の限界が乗り越えられてはいない。

5．「今日ではこういう馬鹿にならなければほとんど生きる道が閉ざされているありさまです。それは現代の報道機関が…免れがたい」ということから教育する最高の働きをするというのは不適切。

〔№　15〕　正答　4

ことわざが近代人にも使われていることが述べられている文章。

1．ことわざには今では役に立たないものもあるとはどこにも書かれていない。

2．近代人に適したことわざに関してはどこにも書かれていない。

3．しばしば意識的にあるいは無意識的にことわざと自分の行為を照らし合わせてみたりとあるから、無意識だけではない。

5．慎重さを求められるときだけではなく、あらゆるジャンルにわたって人生の指針となっている。

〔№　16〕　正答　2

自然に対するヨーロッパと東洋の対し方を述べた文章。

1．自然に対して美的のみならず宗教的関心を抱いたのは東洋的なる詩人芭蕉である。芸術に関しては本文の記述にはない。

3．特に東洋的なる詩人芭蕉は単に美的のみならず倫理的に、さらに宗教的に自然に対したのであり、知的興味を示さなかっただけで、知的興味以外の興味もひかなかったとは書かれていない。

4．東洋においては、人はそこ(自然)に慰めを求め救いを求めるのであるから一方的に働きかけてくるものではない。

5．輩出された優れた詩人の数をヨーロッパと東洋で比較している記述はない。

〔№　17〕　正答　1

時間の長さは物理的時間では一定でも人間的時間ではその人の状態で異なることを述べた文章。

2．少年の頃の日は春の日のように長く、なかなか終わらなかったのは人間的時間があったからである。

3．人間的な時間が猛烈な速さで動くという表現は、車で人をはねたことのある人は、はねてから、その人が地上に落ちるまでを、まるでスローモーションビデオのように、ゆっくりと鮮明に視るという場合の、時間がゆっくりと過ぎるという表現であり、あっという間に時間が過ぎてしまうという表現ではない。

4．物理的な時間は意識を失っても止まらない。とまるのは人間的時間である。

5．物理的時間はだれにも平等に流れる。

内容合致

〔№　1〕　正答　5

旅の忘れ得ぬことは自分の心の中にあることを述べた文章。

1．出会っておしゃべりする人をできるだけ多くしようとは述べてない。

2．小説に描かれた風景や土地を訪れて現実を確認する人もいるというだけで筆者が考えている旅ではない。

3．準備や計画に関する記述はない。

4．旅先での、未知の人との出会い、その人のおしゃべりやアクセントなどの現実とその時自分が味わった何ともいえない感情などが忘れ得ぬことになるのであり、目の前の風景に心を奪われずという現実を無視して、空想や物思いにふける旅のことは述べていない。

〔№　2〕　正答　3

「おれ」の「こんな運命になった」原因を自分の心理分析から述べた文章。

1．わが臆病な自尊心と尊大な羞恥心ということは、雄々しく立ち向かう勇気と反する。

2．詩によって名を成そうと思いながら進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかったという我が臆病な自尊心から才能に対する絶対的な自信があるとは読み取れない。

4．故郷についての記述はない。

5．おれは努めて人との交わりを避けたのであって、世間が自分を受け入れてくれないのではない。

〔№　3〕　正答　1

ありふれた檸檬というものが、心を軽くしてくれたことを述べた文章。

2．始終私の心を圧へつけてゐた不吉な塊というのであるから、自分の悩みは軽いものではなかった。

3．檸檬を食べて元気を取り戻すという記述はない。

4．友達に見せびらかしたかったのは私の熱である。

5．味に関する記述はない。

〔№　4〕　正答　2

絵を描くという行為が古風に思える理由を述べた文章。

1．「情報社会といわれる現実の活動から取り残された時代錯誤的所産に思える」という表現は、絵が古風であることの比喩であって、情報社会から取り残されているから古風であるということではない。

3．絵が時代から取り残されたわけではない。これからの社会で、その時代錯誤的性格故に、あるいはその何の役にも立たないという性格故に、逆に重要なインパクトを持つようになるかもしれないと思うと述べている。

4．３と同様に、時代の進歩についていけないことはない。

５．絵を描く行為を古いしぐさと感じさせるのは、太古以来の描く行為とそれほど隔たりのあるものとは思えないからである。

〔№　5〕　正答　3

ドイツ人と日本人の感覚の違いを述べた文章。

１．ドイツ人は樹齢の古い椿の花が美しいものといえないというのではなく、椿の花が散ったままにしてあることに違和感を覚えているのである。

２．宗教的伝統が異なることから、美に対する感覚が異なっているということではなく、散った花びらをそのままにほうっておくか、片づけるかという文化の違いを述べているのである。

４．手入れの行き届いたお寺で、どこを見てもひじょうにきれいだというのであるから、日本人が細かいところを気にしないとは言えない。

５．ドイツ人が自然よりも人工物を好むとは述べられていない。

〔№　6〕　正答　1

殻の中から出てくる蝉を見ていた幼い日の思い出を述べた文章。

２．不気味さとおそろしさを感じる記述はない。

３．虫の生命の大切さを述べているのではなく、殻の中から出てくる蝉の美しさとそれを見ている作者の様子を述べているのである。

４．蝉だけのことを述べている文章であり、虫を追いかけていたかどうかはわからない。

５．虫の生態の不可思議さだけではなく、それを見ていた筆者の気持ちも述べられている。

〔№　7〕　正答　5

読書ということが昔と現代ではその持つ意味が違ってきていることを述べた文章。

１．読書ということが教養として考えられていた昔なら、読書を趣味とすれば教養ある慰めであるということであり、筆者の考える読書ではない。

２．読書ということは、昔の人の頭では勉強とか教養といった意味も含まれているということであり、筆者の考える読書ではない。

３．筆者は、職業上読書することは普通日常の仕事であって、本を読むということは娯楽ということにはならない。

４．読書は私にとって勉強になる。けれども決して趣味でもなければ娯楽にもならないとある。

〔№　8〕　正答　3

友人関係が成長により、どのように変化するか述べた文章。

1．二人のものの見方や考え方は成長とともに距離が生じてくる。

2．二人が同じように成長しているのならば、たとえ相互の考え方が非常に違っても、それを理解しあうことができる。しかし、それだけではなく、親友は同時に好敵手でなくてはならない。

4．お互いに、自分の成長を気づかせない思いやりをもつだけでは、相互のはげみあい、競争は生じない。

5．相互の考え方に距離が生じてくるが、親友はその距離を理解し合うのか切磋琢磨しあう。

〔№　9〕　正答　3

朔太郎が詩を音楽に近づけようとして敗退した理由を述べた文章。

1．朔太郎が詩を音楽に近づけようとした理由ではなく、詩を音楽に近づけようとして失敗した原因を考えているのである。

2．朔太郎が詩が他の文学とは違って純粋な芸術であると信じているとは述べられていない。

4．遂にはそこに敗退してしまうのであり、問題を解決したとはいえない。

5．１と同じ理由で誤り。

〔№　10〕　正答　1

服従、協力的であることを強制する教育は独創性や非凡な才能の発展を阻害する作用をもっていることを述べた文章。

2．協力も服従も「要するにこれは同じことである」、筆者の主張はこれにより独創性や進取の気性や非凡な才能を抑えつけることのなるということである。

3．多数者の認めることを行う際は少数の弱者の意見を考慮するというということとは逆に教育の場では多数派の協力的な生徒が主体となって少数派の独創性や進取の気性や非凡な才能を抑えつけることが問題であることを主張している。

4．民主主義的教育が社会に貢献する人間を生み出さないということは述べていない。

5．子供の行動を理解するための方法は述べていない。

〔№　11〕　正答　5

あわただしい日常の中で自然の美に対して無感動になりがちであることを述べた文章。１．自然の脅威については述べてない。

2．自分の手や食卓にのった貝などの身近な自然の色や形に感動すべきと述べているのであり、田園で暮らすとは述べてない。

3．自然を保存されることを求めているのではなく、身近な自然の美に感動すべきであることを述べている。

4．人間の卑小さに関しては述べられていない。

〔№　12〕　正答　1

分類は事物にあるのではなく、人の意識の中にあらかじめ実在することを述べた文章。

2．パタンを選びだすことができるのは、分類学の手法によるでなく、パタンが人の意識の中にあらかじめ実在するからである。

3．本文では、それぞれの違いを発見することで、分類学できたというのではなく、あらかじめ人の意識の中に分類の結論があって、その直観に従って違いを明示するというのである。

4．「……全体を調べるようなことはしない。」だけでは不十分。では、どのようにするのか具体的な記述がない。

5．本文では学者と素人の比較をしていない。

〔№　13〕　正答　1

20世紀における芸術に対するわれわれの関心の程度を述べた文章。

2．本文は現代における芸術の享受者のあり方に関するものであり、芸術家が真剣に努力しているかどうかにはふれていない。

3．現代では、芸術と本気でつき合っていたらとても生きてはいけまいというのであるから、本気つきあおうなどという気がそもそもない。

4．ながら族は本気で芸術とつきあおうなどとは思わない。だからながら族なのである。

5．本文では、芸術家の創作意欲に関してはふれられていない。

〔№　14〕　正答　1

19世紀と20世紀の小説における現実の認識のしかたを述べた文章。

2．20世紀の小説の現実の認識のしかたは、自分の主観によって現実を眺め、その主観は常に現実の一部しか捉えないのであるから、現実をあるがままのものとして直視しているわけではない。

3．19世紀の小説においては、作者はいわば「神の位置」を占めてすべての人物を見通しているのであるから、作者と主人公の関係は明瞭である。

4．現実の認識のしかたが客観的か主観的かという違いは述べられているが、人間自身が変化する変化しないというようなことは述べられていない。

5．本文では、20世紀の小説は、主観によって現実を眺めたことから主人公の精神のなかで現実の姿が幾度も変化していくと述べている。精神そのものを小説の対象としたのではない。

下線部の意味

〔№　1〕　正答　2

現代文明による環境破壊から、文明の見直しが必要であると述べた文章。

1．文明の見直しは、文明を発展させようとすることではないかも知れない。

3．その痛みを覚悟するのはすべての人であろうから、現代文明から恩恵を受けている人という限定した表現は不適切。

4．その痛みは環境破壊そのものによるものではなく、文明の便益を受けられなくなることによる不便さである。

5．文明の見直しについて述べているのであり、文明の発達は環境破壊を招かざるをえないとあきらめているわけではない。

〔№　2〕　正答　3

社会的な意味の大人に関して述べた文章。

1．限りない責任を一身にひきうけるのであるから、責任を分担し合っているのではない。

2．他人の言うことを無視しては、自己のおかれた社会の責任は果たせない。

4．限りない責任を一身にひきうけるのであるから、他人とともに恐怖に耐えるような大人ではない。

5．決して単に年齢のことではないのであるから、法的責任を有するかどうかという大人のことを言っているのではない。

〔№　3〕　正答　4

父と娘の気持ちのすれちがいを述べた文章。

1．娘は父親と話を聞いてもらいたかったのであるから家庭に存在していないわけではない、また娘は笑って答えたのであるから父親の質問が煩わしかったわけではない。

2．笑って答えたのであるから、無視しようとしたのではない。

3．本当は父親と話したかったのであり父親の助けを必要としないということではない。

5．単純に父親に質問するのをやめようという決心を表わしたのではなく、疲れている父親への遠慮を混じえた批難の感情を表わしたものである。

〔№　4〕　正答　2

吹雪に逢って祖父の言葉を思い出して吹雪に立ち向かっていこうとする少年のことを述べた文章。

1．自分で立ち向かって行こうとしているのであり、助けを求めようとはしていない。

3．１と同様、自分で立ち向かって行こうとしているのであり、どうなってもいいというような気持ちはない。

4．動悸がはげしい。ふたたびうつむきたい衝動をこらえているのであるから、冷静さはない。

5．吹雪に立ち向かっていこうという心から湧き出る力強い気持ちが大部分であって、腹立たしい気持ちは読み取れない。

〔№　5〕　正答　1

一般国民の知る権利について述べた文章。

２．本文では、民主制を前提とし、誰でも政策のよしあし、利害損失を判断することができるものとみて、一般国民は過誤をおかすことのないよう、できるだけ判断の材料となる事実を知ることが必要であるということである。したがって、一般国民に伝えることは判断の材料となる事実であって、政治の専門知識に限っているわけではない。

３．一般国民は判断するために知ることが必要だというのであって、一般国民が専門家の過誤を訂正させるということまでにおよんではいない。

４．３と同様に、政治の専門家の判決を評価するということまでにおよんではいない。

５．一般国民は判断するための事実を知る必要があるのであって、政治というものを教えるということではない。

空欄補充

〔№　1〕　正答　5

批評について述べた文章。

１．批評とは（批判）を吟味することとすると、批評と批判は同じような意味であるから不適切。

２．作品を学習することは不自然である。

３．作品との関係が驚異によって成立するというのは不自然である。

４．空欄を創作とすると、批評と創作の主体が同一になってします。

〔№　2〕　正答　3

青春とは心の持ち方であることを述べた文章。

１．成長期という言葉には青春という言葉と比較すると、豊かな創造力、燃える情熱などに相応しくない。

２．成人は、いわゆる大人から老人まで含んでいるから、しなやかな肢体をあらわすことばとすると不適切。

４．健康ということばを入れると、年を重ねただけで人は老いないという文が不自然になる。

５、少年ということばを入れると老人に少年があるという言い方になり不自然である。

〔№　3〕　正答　2

古典について述べた文章。

１．国語は古い時代に作られたものに限らない。

３．和歌は、最後の（　　）の文章の美しさ、には当てはまらない。

４．歴史は、最後の（　　）の文章の美しさには当てはまらない。歴史は美しい文章だけには限らない。

５．漢文は仮名使いという表現と矛盾する。

〔№　4〕　正答　3

Aには価格か性能が入るが、技術にとって重要なのは(性能)であって価格は不適切である。低価格と高性能で競争が行われ、(　B　)は犠牲にされる、ということからBには価格や性能とこれに類するものは入らない。同じ性能なら(　B　)の高いもの、というのであるから信頼性ということばが適切である。

〔№　5〕　正答　4

Aは、自然の中に存在するものはすべてそれぞれ持っているものとして、緑の草はいつも緑であり、青い衣装は飽くまでも青い衣装であったということから、固有の色が適当である。Bは、具体的には、白から黒にいたる各種の灰色によって表現されていたということから、色調や彩度の変化ではなく、単なる明暗の変化が適当である。

〔№　6〕　正答　3

書籍はかたい感じの読者を限定しそうなイメージであり、本は一般大衆向けに軟らかい感じのイメージであることを述べた文章。

以上のイメージにしたがって、空欄に該当する語を入れていくと、

A－書籍　　B－本　　C－書籍　　D－本　　E－書籍　　F－書籍　　G－本

〔№　7〕　正答　4

子に対する親のあり方を述べた文章。

1．親切な他人とすると、「子供を理解しようとしたり一緒に悩もうとしない」のであるから不適切である。

2．原則的には親は子供の内面についてはほっておくしかないのだ。理解しようとしたり…ということから熱心ではないし、教師としてやるべきこととは反する。

3．怒りや口惜しさを、加工しないで子供にぶつけたいと思っているのであるから、子供に甘くはない。

5．怒りや口惜しさを、加工しないで子供にぶつけたいと思っているのであるから、子供を無視するのではない。

〔№　8〕　正答　3

人が考える場合、概念と論理だけによるのでなく、イメージと想像力にもよることを述べた文章。

1．思考は概念と論理だけによるのではなく、イメージと想像力にもよるのであるから適切でない。

2．日常生活の場面に引きもどしてかえりみるならば、これはあたりまえのことと見なされようというのであるからきわめてまれではない。

4．例示の友人に手紙を出したことに限っての思考であれば常に相手の立場にたつということは適切ともいえるが、例示を越えて日常生活のなかの思考を一般的なまとめとしての表現では不適切である。

5．ことばが思考の着物ではなくて、思考の肉体であるということは、ことばによって考えている

のであるから不適切である。

〔№　9〕　正答　1

納得の仕方について述べた文章。

「……、つまり(　A　)でよいとはいうものの、それでは尽くせない気持ちがあるわけです。ほんとうに納得がゆくというのは、単につじつまがあっているのとは違って、……」の文章から、Aに入ることばは、「つじつまがあっている」ということと同じ意味が入るべきであるから、「論理や実証」が入る。「それは俗にカンといわれたり、直観、想像力、構想力といわれたりしているものと関連しています。そこにキチンとした論理的思考の背後に(　B　)による思考の根元的な役割を……」の文　から、Bに入るのは、カン、直観、想像力、構想力を表す言葉であるから「イメージ・シンボル」が入る。

〔№　10〕　正答　4

心を天気に例えて、良い天気に関するとらえ方を述べている文章。

「太陽が照っている時を良い天気といって(　　)と思い込んでいるのだけれど、日照りばかり続いたら……」の文章から(　　)の中は日照りばかり続くことと同じような意味のことばが入る。したがって、「良い天気」は多いほど良い、適切である。

〔№　11〕　正答　2

意地に対する肯定的評価と否定的評価について述べた文章。

Aは「美徳」を形容していることばなので「肯定」。Bは意地を肯定的にとらえた前文を受けて、しかしで始まる反論として、「(　B　)的なかたちばかりで用いられるものではない」の文章に入るのは「肯定」である。Cは反論そのままを述べているのであるから「否定」である。DとEは、意地を良く評価している前半は「肯定」、否定的な評価をしている後半は「否定」である。Fは、近藤勇とか森の石松といった大衆文化のヒーローとはいっても、まともな世間からはずれた者という意味で「否定」が入る。Gは、意地が必ずしもよく考え抜かれたすきのない正義の証明のためにのみ用いられるのではなく、本人にも反省すべき点が相当あるにもかかわらず、それを反省しようとせず…とあるから「否定」が入る。

〔№　12〕　正答　2

Aは、昔は生活が歩行中心だったが、「いま再び人々は(　A　)を求めはじめた」に入るのは、歩行中心と同じ意味をもつことばの「歩く道」または「歩くこと」である。

Bは、「…「買物道路」も求めはじめた。しかし、かといって道路が(　B　)にこびてはならない。」に入るのは、買物道路という歩行と同じ意味をもつことばとして「歩くこと」である。

Cは、「歩く魅力にあふれていなければならないが、そのために厚化粧してはならない。(　C　)、歩くことを挑発したりしてはならないのである。」前文の厚化粧してはならないという文の言い換えであるから「つまり」が入る。

〔№　13〕　正答　4

豆腐の豆腐としての存在について述べた文章。

Aは、「……変幻自在に豆腐としての存在を主張している。」という文を受けて、「(　　)、過度な自己主張はなくて、…」と同じ内容を控えめにくりかえしている。「さらに」か「しかも」が候補に上がるが、「さらに」というほどつけたして強調するわけではないから、「しかも」が適切である。

Bは、「……しょっぱかったりする味付けに従うとみせながら、その実(　　)自己主張している。」と豆腐の決して自分の味を失うことがないという自信を表すとすると、「がむしゃら」というようなことばではなく「したたかに」が適切である。

Cは、「自分はわきに控えながらも、本来備わった品位を毅然と保っている。」を受けて、「豆腐は(　C　)を失うことはない。」に入ることばは「存在」か「自己」であるが、単なる存在ではなく、豆腐としての存在という意味で「自己」が適切である。

〔№　14〕　正答　3

自己の否定は人生の肯定を意味することを述べた文章。

「自己の否定は人生の肯定を意味する」ということから、Aは「否定」、Bは「肯定」である。「古今東西のすぐれた哲学と宗教とは、すべてことごとく自己の否定によって」人生を肯定することを教えているので、自己の否定によって、「本質的価値を強調することを知る者にとっては」、否定も肯定の逆説につながる。Cは「否定」となる。

〔№　15〕　正答　2

批評と評判の関係や違いを述べた文章。

評判とはうわさなどの世間の人が下す批評の一部である。批評は物事の長所・短所をとりあげて対象を論ずることである。このことからAは明らかに「評判」であり、Bは「批評」である。またCは、Bと同じであるから「批評」である。Dは「本来なら(　　)で
なく、」ということは本来ならCではないということであるから「批評」である。「(　E) を(　F　)の如く受け取り、」という表現は、Eは噂などの「評判」とし、Fを「批評」とすると自然である。

〔№　16〕　正答　3

ユーモアと風刺について述べた文章。

「(　A　)は毒のないものであり、(　B　)は毒のないものであります。」これは明らかにAはユーモアでありBは風刺である。Cも「人を怒らせることがありません。」であるからユーモアである。DとEは文の流れから同じものが入る。風刺とすると、風刺は一定の政治目的や党派の目的のために使われているので不適切である。Eはユーモアである。Fは、「(　F　)とは、我々が現象だけにとらわれ……。それも緊張に際して行動の自由をうばわれる人間の窮屈な神経をときほぐし、生活上の行動に対して自由な楽な気分にして励ますものであります。」と次の文まで含めてよめばFはユーモアであるとわかる。最後のGはイギリス人が激しい戦闘の中でも発揮する精神といえば風

刺は不自然であるからユーモアが適切である。

〔№　17〕　正答　4

幸福と幸運の違いを述べた文章。

Aは偶然によって与えられるものではないということから、選択肢の偶然を意味する「運命」や「幸運」ではなく「幸福」であることがわかる。Bは、「しかしそれは(　B　)であって、真の(　A　)とは区別せられている。」ということから、「幸運」である。Cは、「禍福はあざなえる縄のようなものだという古い言葉があるが、」から、Bの「幸運」とは反する語が入るとわかる。Cは「不幸」となる。

整序

〔№　1〕　正答　3

法隆寺の五重の塔が1300年もの間、狂いもなく建っていることを述べた文章。

Bの文は「こういう部材を集めて……」とあるから、前の文はこういう部材を説明したぶんであるはずである。Cを前の文とすると「……極めて正確に加工された部分…」「を集めて全体を一つにまとめあげることは、至難の業であったでしょう。」となり不自然である。Eを前の文とすることは、部材の説明もない文であるからつながらない。したがって、前の文はAまたはDとなる。この順序になっているのは、選択肢の３と４と５である。

４では、ＣとＥで「細部に至るまで、極めて正確に加工された部分が精密に組み合わされている」「それを見事にやってのけ、…」と精密であることを強調して述べておきながら、A、D、Bで寸法がすこしずつ違っているものをまとめあげることは至難の業であるというのは不自然である。５では、Dで突然にくせのある木を割って、それを削ったのですから割りすぎ削りすぎがあるのは当然というようなことが出てきて不自然である。

〔№　2〕　正答　2

芭蕉と蕪村の句を比べると蕪村のほうがおもしろさがわかりやすいと述べた文章。

Bの文は「芭蕉の句などというのは、初めて読んでおもしろいというのは、」に続く文として自然な言い回しは、「ない。」という否定で終わる文である。Eの「そうたくさんない…」が続くのがしぜんである。これに該当するのは、選択肢の２と５である。５はB―E―Cと続くが、Cはいきなり「その絵の姿が…」と「その」の示すものが不明であるから不適切である。

〔№　3〕　正答　4

物を一面からしか見ないと、自由な発想を制限してしまうことを述べた文章。

Ａは「物を一面からしか見ないということは…」という記述は前の文に「物を一面から見る」という記述が出てきているはずである。それを探すと、Ｅに「物の一面のみをとらえて、」という記述がみつかる。Ｅの文の主語は、Ｂの「私たちは、」しかない。さらにＣもＤもＦも最初のぶんとしては不自然であるから、最初にＢが来て、その述語としてＥが来る。Ｆの「だが、ちょっと立ち止まって…」という文はこの次においてＣを続け、Ａ、Ｄとするのが自然である。したがって、正しい並べ方は、Ｂ―Ｅ―Ｆ―Ｃ―Ａ―Ｄとなる。

〔№　4〕　正答　4

夢について述べた文章。

ＢとＦの文は「しかし」という接続詞で始まっているから、最初ではない。Ａは「夢については…」とあり、「夢」という語が前に出て来てそれを受けての文とするのが自然である。Ｃは「夢と現実という二つの世界…」と夢と現実を同じ程度に扱っているから、Ａの前の文としてはＤの「夢とはなにか、」の方が自然である。したがって、Ｄで始まり、Ａが続き、Ｂで「しかし、…」と夢の神秘を解きあかす難しさを言い、さらにＥの「しかし、人間は夜ごとに夢をみる。」最後にＣとなる。

〔№　5〕　正答　4

朝の出会いのあいさつが必要なのは、両者の関係が分かれる前と同じで変わっていないことを確認するためであることを述べた文章。

「一夜明けた朝のあいさつが必要なところからみると、」に続くものとしてそれぞれを順番に続けて自然なのはＣである。選択肢の４と５が該当する。両者を比較すると５のＥからＦへのつながりが「…その間に二人は別々の経験をするわけだから、」「同じ情況の下で経験を積んでいるわけだから…」と不自然な言い回しとなる。４の順番が論理的にも記述のしかたも自然である。

〔№　6〕　正答　2

ささやかなことばの一つ一つが人間全体の世界を反映していることを述べた文章。

Ａ～Ｅのうち最初の文となりうるのはＢかＤである。Ｄは単独に取り出して美しいことばとか正しいことばとかいうものはありはしない。」という記述はこの文より前に「美しいことば、正しいことば」という表現が出ていると考えるのが自然である。Ｂがそれにあたる。したがって、Ｂ－Ｄと続くのは選択肢の２しかない。１もＢで始まるがＢ－Ａと続けると、Ｂでは「美しいことばとか正しいことば…」と述べておきながら、Ａでは「ささやかなことば」となってつながらない。

〔№　7〕　正答　4

テレビは虚構時間の迫力で現実感を失わせるが、マラソン番組は逆にリアリティを与えることを述べた文章。

Ａ～Ｆのうち初めに位置する文としてはＢ、Ｃ、Ｅが考えられるが、Ｂは主語が明確でないので不適切である。Ｃはいきなり「時間が生々しいものになったとき…」という生々しいという意味が明確でない。Ｅが最初であるのが最も分かりやすい。Ｅの説明としてＡが続き、Ｄで「しかし」とマラソン番組の特殊性が取り上げられる。

〔№　8〕　正答　2

宇宙は時間も空間も巨大であり、人間の常識的な概念や感覚では推し量ることはできないことを述べた文章。

最初の文章の百五十億年という時間を受けて、Ｂの「その膨大な時間を…」と続くのが自然である。Ｄの「そうした知的生物は、…」の前に、Ａの「…進んだ文明を持つ知的生物が…」が来て、Ｃは最後のまとめとなる。

〔№　9〕　正答　5

質問者と回答者という役割で分けると、質問はＡ、Ｃ、Ｅ、Ｇで回答はＢ、Ｄ、Ｆ、Ｈである。回答Ｂの「企業のそれよりは大分遅れるでしょうね。」ということから、前の質問で企業に対するものに関する質問があるはずである。Ｇの「一方、家での情報化については、…」がその質問とわかるから、Ｇは７番目となる。Ａの質問に対する回答は、ＦもＨも不自然であるから、Ｄである。質問Ｃに対する回答はＦであり、質問Ｅに対する回答はＨであるが、その順番はＣ―Ｆ―Ｅ―Ｈとなる。まとめると、Ａ―Ｄ―Ｃ―Ｆ―Ｅ―Ｈ―Ｇ―Ｂとなる。

〔№　10〕　正答　3

選択枝はいずれもＡで始まりＧで終わっている。Ｂの「しかし実質的な翻訳がこれに限るものでない…」の文の前にＥの「普通、翻訳といえば……」がくることがわかる。したがってＥ―Ｂとつながるので、選択肢３か５に限定されてくる。しかし、５はＥ－Ｂの前にＦが来ている。Ａで「外国のことば……」と述べ、Ｅで「…外国語の自国語訳だけ…」と外国語に限定しているのにその中間に「…他人の心事…」と外国語以外のものが出てくるのは不自然である。